

「な　く　に」　に　つ　い　て

吉　永　登

本論考は木下正俊氏の『万葉集研究第一集』所収の『「な　く　に」
覚書』に示唆を得て書いたものである。万葉集中一五〇ばかりも用
いられているナクニが、多くの問題をはらむことばであることを注
意してくれた該論文に心から感謝する。

一

注釈書にあたってみて驚いたことは、同じナクニに対する解釈が
まちまちであるということであった。これは木下氏も指摘するところ
であるが

1 軽の池の浦み行きみる鴨すらに玉藻の上に独り寝ナクニ

(巻四、三九〇)

について言っても

……鴨でも、美しい藻の上に、ひとりでは寐ないのです。

(全註釈)

……独りで寝ることにはないのに(大系本)

などと、あるいは詠嘆的終止に解し、あるいは逆接に解している。

「な　く　に」について(吉永)

同じことばを両様に解していて、それでなお且つ口訳だけを眺めて
いると文意という点からいえば通っているのが何とも不思議
といえないこともない。
実のところこんな例は数え切れないのであるが、今一例だけを挙
げることにする。

2 宇治間山朝風寒し』旅にして衣貸すべき妹もあらナクニ

(巻一、七五)

……自分は旅先のことであって、衣を貸してくれるような妻も
無いことである。(全註釈)

……旅をしているので私に衣を貸してくれるはずの妻もないの
に。(大系本)

これまた前者は詠嘆的終止に、後者は逆接に訳している。それで
いて両者ともに文意が通るところに問題があるといえようか。

注釈書間に解釈の違いがあっても前にあげた二例のように、全註
釈が共に詠嘆的終止に、大系本が共に逆接にと解しているかぎり、
注釈書の持つ個性として見過ごすこともできないこともない。しか

しそれが時として同じ注釈書が異った訳をしているから厄介である。
たとえば

3 うち日さす宮にはあれど「月草の」移ろふ心我が思はナクニ
(卷十二、三〇五八)

4 「丹波道の大江の山の真玉づら」絶えむの心我が思はナクニ
(卷十二、三〇七一)

の二首について言えば、括弧内はいずれも枕詞もしくは序で、作者の言おうとしているところは、四・五句にあることは言うまでもない。しかもナクニを含む第五句は全く同じである。しかるに大系本の万葉集ではそれぞれ

……ツキクサのように色変りやすい心を私は持っておりませぬ。
……二人の仲が絶えるようにしたいという気持は私は持っていないのに。

と訳している。前者は詠嘆的終止であり、後者が逆接であることは言うまでもない。

さらに次のような例になるといっそう複雑である。すなわち

5 見渡しに 妹らは立たし この方に われは立ちて 思ふそら
安からナクニ 嘆くそら 安からナクニ さ丹塗の 小舟もが
も……(卷十三、三三九九)

6 ……麗し妹に 鮎を惜しみ 投ぐる矢の 遠ざかりゐて 思ふ
そら 安からナクニ 嘆くそら 安からナクニ 衣こそは ぞ
れ破れぬれば……(卷十三、三三三〇)

について言えば傍線の部分を大系本ではそれぞれ

(5) ……思ふ心地も安らかでなく、嘆く心地も不安でいるのです。
——詠嘆的終止

(6) ……慕う心地も不安で、嘆く心地も不安でいるが、——逆接と訳している。一つ注釈書がナクニを含む同じ句を違って訳している点はすでに指摘した。しかるにこれを全訳ではそれぞれ

(5) ……思ふ心も安くなく、嘆く心も安からざるが、——逆接
(6) ……思ふ心も安らかでなく、嘆く心も安らかでない。——詠嘆的終止

と、大系本とは全く反対に訳している。全訳の方が古いので、大系本の方が意識して逆に訳したとも思えるくらいであるが、まさかそんなはずもあるまい。

いずれにしても、ことばの解釈である。通じるということだけですまされる問題でない。どうして二つ以上の解釈が成立つように見えるのであろうか。一体どちらが本来の意味なのであろうか。

二

木下氏はナクニの文中のあり方を分類して次の三つを考えている。

- A ナクニ止め(句切がない)
- 7 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はナクニ(卷二、一六六)
- B ナクニ止め(句切がある)

8 わが大君ものな思ほし』皇祖神の継ぎて賜へる我なけナクニ

(卷一、七七)

C 句中のナクニ

9 いちじろく時雨の雨は降らナクニ大城の山は色づきにけり

(卷十、二二九七)

右のうち、Aについては木下氏は詠嘆的終止に解する注釈の多いことを指摘しているが、必ずしもそうとは限らない。しかも驚くべきことは、同じ歌のナクニが、詠嘆的終止、順接・逆接の三通りに解せられるということである。現行注釈書には必ずしも三通りの解釈が揃っていないとしても、少くとも三通りに解釈できることは否めない。たとえば

7 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はナ

クニ(卷二、一六六)

を例にとる。

……それを見せるべき弟がこの世にいるとは誰も言わないことである。(大系本)

……世に存していると人がいわないことであるのに(窪田・評釈)

……見せるべき貫方が、この世に生きて居られないから悲しい。

(全釈)

全釈は傍線を引いて一応は余意ととっているが、窪田の評釈の「のに」に較べれば順接として解していることは明らかであろう。

もちろんこんなに三通りの訳の揃った例はほとんどない。しかし

「なくに」について(吉永)

可能であることは、たとえばはじめに引いた。

1 軽の池の浦み行きみる鴨すらに玉藻の上に独り寝ナクニ

(卷三、三九〇)

については、詠嘆的終止に訳すものと、逆接に訳すものがあることはすでに言った。しかも現行注釈書には見られないが、この歌は順接として

……鴨だつて玉藻の上に独り寝ないのだから、わたしだけが独り寝ることはないのだ。

と訳しても、意味は結構通るのである。

今一つ例をあげておく。

10 志賀の海人は藻刈り塩焼き暇なみ髪梳の小櫛取りも見ナクニ

(卷三、二七八)

の歌についていえば

……暇がないので髪をすく櫛を手にとって見もしないことだ。

(大系本)

……櫛笥の櫛さへも、手に触れても見ぬのになあ(金子・評釈)

という終止・逆接二通りの訳がある。しかしこの歌のばあいも、

……暇がないので櫛も手に取らないから、(化粧もしていないから)美しくないので。

ら美しくないのだ。

と順接に解することも出来ないことはない。

詠嘆的終止はともかくとして、どうして順接という全く相反した二通りの解釈が可能なのであろうか。答は簡単で、接統的役目をは

たすべきナクニに順接逆接を決定する機能がなく、しかも順接か逆接かをきめるはずの受け部すなわち後段を欠いているからである。

たとえば

10 垣ほなす人は言へども高麗錦紐解きあけし君にあらナクニ

(卷十一、二四〇五)

を例にとる。現行注釈書は条件法に限る限り、逆接に解するものばかりで

…私たちをとりまいて人の噂がひどく立っているけれど、…
…共に寝たあなただというわけではありませんのに。(大系本)
と訳している。このばあいは「何ということです」ということばでも補うことになろう。また順接に訳して

…共に寝たあなたでもないのですから。

とすれば、当然余意として「とやく言われるいわれがありません。」などが考えられるのである。結局後段を欠くこと——もともと条件法でないのだから後段がないことも不思議でない——が順接にも逆接にもとることが出来るゆえんであろう。

三

BはAと異って倒置法的形態を取っており、したがって条件法的に処理することになれば受け部すなわち後段と見るべきものが存在する。後段があることは、条件法と考えれば、たとえ順接と逆接とを区別する助詞がないとしても、前段との対比において自ら順接と

逆接とが明らかになろう。したがってAのように順接と逆接とに解するような自由は存在しない。いずれか一方になるのである。

たとえば

11 三笠山野辺行く道はこきだくもしじに荒れたるか』久にあらナ

クニ(卷二、二三三)

を条件法で解すれば逆接として

大変に草が繁く荒れたことであるよ。皇子さまがお隠れ遊ばし
てから久しいことでもないのに(大系本)

と訳すよりほかはない。これを順接として「久しくないから」と解すれば意味が通らないことになろう。久しくなれば荒れるという常識が背後にあつて前段と後段との関係から順接か逆接かを割出すことになるのである。

また

12 名草山ことにしありけり』我が恋ふる千重の一重も慰めナクニ

(卷七、二二二三)

は順接として

名草山というのは言葉だけであつた。私の苦しい恋心の千分の
一も慰めないのだから。(大系本)

と解されている。名だけでなく実が伴ったら、当然慰めてくれるはずであるという常識のもとでは、これを逆接に解する余地はない。もちろん「名だけだよ』ちつとも慰めてくれないのに」と解しても何だか意味が通じるようにも思われる。しかしそれは「慰めても

くれないのに、名草(慰)山などと名をつけて」などという感情の屈折を余意として感じさせるからで、ことばの解釈とは一応切離して考えるべきであろう。この歌に関するかぎり逆接に解している注釈書は見当らない。

Bは条件法に解するばあい、順接か逆接かのいずれかであるが、中には

13 真葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも』わがなけナクニ

(卷十一、二八三五)

のように

私が居るからは勝手に人が引き取ることが出来ようや。……出来るものか(全釈)

他人が心の底からあなたの気持を引いてしまうということがありましようか、私というものがおりますのに。(大系本)

と、順接と逆接との両様に解されているものがある。このばあいても順接と逆接とは紙一重の違いであるからと逃げをうつつことは許されない。

これは受け部すなわち後段が肯定と否定とから成る反語であるため、

わたしがいるノニ→引くカ(肯定)

わたしがいるカラ→←引かない(否定)

のようにノニは肯定部に、カラは否定部に対応することによるのである。

「なくに」について(吉永)

また後段が反語でもないのに、同じように一つの歌を、順接と逆接とに解しているものに

14 我がゆゑにいたくなわびそ』後遂に逢はじといひしこともあら
ナクニ(卷十二、三二一六)

……嘆きなざるな。後々までも逢はないと言ったことはないのだから。……(全釈)

……後に遂に会ふまいと言ったこともないのに。……(私注)

15 海原に浮寝せむ夜は沖っ風いたくな吹きそ』妹もあらナクニ

(卷十五、三五九二)

……沖の風よ、ひどく吹くなよ。妻も居ないのだから。(全釈)
……妹も居らないのに。(私注)

などがある。

両者に共通するものは受け部すなわち後段が否定形になっていることであろう。前述反語に見られた肯定と否定とが、ここにも不完全な形ではあるが存在するということである。すなわち

逢わないといったこともないノニ→←

わびしく思う(肯定)→な(否定)

逢わないといったこともないカラ→←

となるのである。両者を比較すれば明らかのように、逆接は「逢わない」といったこともないノニ→←わびしく思う(そんなことをするな」という形になってはじめて通じるのであって、その点ことばに忠実な解とはいえないのではなからうか。

さらには後段が反語でも疑問でもないのに順接と逆接とに解せられていたものに次のような例がある。すなわち

16 渡守船はや渡せ』一年に二たび迎ふ君にあらナクニ(卷十、二〇七七)

……船を早く渡せよ。一年に二度と通ふ君ではないのであるから。(私注)

君ではないのに(大系本頭注、全体の口訳はつけてない)などがその例である。

後段が反語でも疑問でもないの両方に解される秘密は恐らく「二度と来る方ではないノニ『何をぐずぐずしているのか』早く渡せ」と二重括弧の中を余意として補っているからであろう。もとよりこゝには忠実な解釈とはいわれない。

以上後段があるにかかわらず、順接と逆接との二通りに解されているものについて私見を述べたのであった。しかしこの型についてもっと大切なことがある。それは例外なく詠嘆的終止に解せるということである。現に一・二を除いてどの注釈書かが詠嘆的終止に訳している。最後の16の「渡守船早渡せ」(二〇七七)の歌にしても……一年に二度と通うあの方ではないのです。(全註釈)となつてゐる。

注釈書を通じて詠嘆的終止に訳されていないものは、はじめに挙げた11の「三笠山野辺行く道は」(二三三)くらいのものである。

この歌はたしかに詠嘆的終止には解しにくいように見えるが、しか

しこれも「ひどく荒れたものだなあ、そんなに時もたつてはいないことだ」と解しても、それなりに通るようにも思われる。

四

Cはナクニを中に前段と後段からなっているので、条件法に解せられるのが一般である。しかしそれでいて、詠嘆的終止の一つの変化と見られるいわば詠嘆的中止とでもいうべき解もないでもない。たとえば

17 大海に島もあらナクニ海原のたゆたふ波に立てる白雲(卷七、一〇八九)

にしても、逆接として

……島もないのに、海の上に漂つてゐる波の彼方に、白雲が立ってゐる。(全釈)

と訳しているが、別に

島一つなくて、海原のたゆたう波の上に堂々と立っている白雲よ。(大系本)

のように、条件法とは関わりのない詠嘆的中止として訳しているものもある。

中には

18 見まくほりわがする君もあらナクニ何しか来けむ馬疲るるに

(卷二、一六四)

のように

……君もはやなくなってしまったのに、どうして上京したの
だろう。……(大系本)

と逆接にしか解していないものもある。しかしこのばあいもいわゆる
詠嘆的中止とみて「君もいなくて、どうして来たのだろうか」と
解しても意味が通るのではなからうか。近ごろ末句「馬疲るるに」
を「馬疲らしに」という旧訓に返そうとする動きもあるが、これが
あたらないことは後に述べることにする。

さてこのC型はことごとく詠嘆的中止と解せるのであるが、条件
法として解するばあい、そのほとんどが逆接に解するものばかりと
いってよい。前に挙げた二例はもとよりのこと

19 大君の遣さナクニさかしらに行きし荒雄ら沖に袖振る(巻十六、

三八六〇)
のごときも

天皇の命を受けて派遣されたでもないのに、さかしらに(自
分の心から進んで)行っただうちの人が……(大系本)

と逆接に解している。

ところで例外なく逆接に解せるとなるとそこにまた何等かの理由
を考えなければならぬことになるが、順接に解しているものもない
でもない、すなわち

20 来てみべき人もあらナクニ我家なる梅の初花散りぬともよし

(巻十、一三三二八)

を

「なくに」について(吉永)

来て見そうな人もないのだから、私の家の初花は散ってしまっ
てもよい。(大系本)

と解しているのなどがそれである。注釈書の多くは

来て見るべき人もないのに、吾家の梅の初花は、一そ散ってし

まはうともよい。(私注)

と逆接に解しているが、「来て見るべき人もないのに『咲いている。
そんなこと無駄だから、一そ』散った方がよい」と二重括弧の中を
余意として補っているから通じるのであって、ことばに忠実な解と
は言われない。恐らくそんなことさえ気付かないで墮性で逆接に
訳しているのではないだろうか。

今のばあいも詠嘆的終止と見る

来て見るような人も無いことだ。わたしの家の梅の初花は、散

ってもよい。(全註釈)

などがあることを忘れるべきでない。

要するに、ナクニ自体には順接と逆接とを決定する力がなく、前
段と後段との関係が決定することは疑うべきもない。

以上をまとめると

Aは詠嘆的終止と条件法とに解せる。

条件法のばあいは後段に当る部分を欠いているので、後段の補い
方によって順接とも逆接ともなる。

Bは詠嘆的終止と条件法とに解せる。

条件法は後段に当る部分があるので、一応順接と逆接とのどちらかになる。

中には順接と逆接との両様に解せるものがあるが、それは後段に当る部分が反語もしくは疑問の形をとるばあいに限られる。

Cは詠嘆的終止もしくはその中止形として解することができる。しかし条件法としての解釈が前面に押出される傾向が強い。このばあいも順接と逆接とがあるが、それを決定するのはナクニでなく、前段と後段との関係である。

五

さてナクニ本来の意味は何であろうか。注釈書の現況は、詠嘆的終止（その中止的用法）もしくは条件（順接、逆接）の二つのばあいの可能性を示している。しかし二つが共に正しいことはありえない。どちらかが正しいか、どちらも正しくないかの二つである。

まずわたしたちは上記A・B・Cを通じていずれも例外なしに詠嘆的終止（その中止的用法をも含めて）に解せることに注目すべきである。

条件法のばあい、ナクニにはそれ自身では順接と逆接とを決定する能力がなく、それを決定するものは、前段と後段との内容の関連である。もしナクニに条件法を成立させる能力があるならば、あるいは順接になり、あるいは逆接になるなどという自由はないはずである。

たとえば順接を作る接続助詞カラにしても

割安だ カラ 買う。

に対して、多少抵抗を感じるにしても

割安だ カラ 買わない。

という表現もあって、両者はまぎれもない順接である。前段と後段との関係からいえば、後者は逆接であってしかるべきであろう。それを拒否するものが接続助詞カラである。そして話し手（作者）に割安で買つて失敗した経験が、このように言わしめるのであろうと聞き手は想像したりする。それがカラの機能であって、ナクニにはそんな力はない。これがナクニが条件法を作ることに直接のかわりがないとする理由の一つである。

また

21 遠妻の ここにしあらねば⁽¹⁾ 玉梓の 道をた遠み 思ふ空安け⁽²⁾

ナクニ 嘆く空苦しきものを み空ゆく 雲にもがも……（巻

四、五三四）「苦しきものを」は本文「不安物乎」、「安からぬものを」

と訓む説あり。

の傍線部(1)(2)(3)の辺りは

……道が遠いので、妻を私が思ふ心は安くもなく、嘆く心も

安くもないよ。（全釈）

……その道がまあ遠さに一寸は逢へぬので、恋ひ思ふ心地が⁽¹⁾
落ち着きかねるのに、思ひ嘆く心地が⁽²⁾落ち着きかねるのを⁽³⁾

（金子、評釈）

という二通りの解がある。前者は(1)「道が遠いので」と(2)「安くもなく」(3)「安くもないよ」との呼応が自然で滞りがない。しかるに後者は、順接の(1)「逢へぬので」の次にさらに逆接の(2)「落ち着きかねるのに」と(3)「落ち着きかねるものを」とが畳みかけるという不自然さを侵している。それに逆接の(2)と(3)にしても、こうした同種類の前段が併立するばあい、はじめの方を中止形にして接統助詞は終りの方だけに用いるのが自然である。すなわち(2)「心地が落ちて着きかね」(3)「思いも落着きかねるノニ」とあるべきであろう。逆にいえばそのゆえに「安けナクニ」は詠嘆的終止の中止形と見るべく、条件法とはかわりがないとする理由の二つである。

それではナクニのニは何であろうか。木下氏は武田祐吉の全註釈の「宇治間山」(巻一、七五)の語釈にいう

アラナクは、あらぬこと意。クは動詞、助動詞、形容詞に接続して、それらを体言化する用をする。ニは感動の助詞であるが、軽く添へてゐる。妻も無きことよと嘆じてゐる。

を引用して武田のニは感動の助詞であるという説を否定している。他にニが感動の助詞として用いられた例もないので木下説は従うべきであろう。

私の考えはすこぶる単純である。いわゆる指定の助動詞ナリの連用形のニではないかと思つている。だからこそ詠嘆的終止の中止形でありえたであろう。否むしる中止形が本来の意味ではなかっただろうか。話しことばの「結構なことだ」と揆を一にするものと考え

「なくに」について(吉永)

たい。それがAのばあいのように文末に来た時に詠嘆的終止の役目をはたすのではなからうか。

六

最後に前にも少し触れておいたが、このナクニを詠嘆的終止に解するか、条件法に解するかによつて、他の部分の読みとしたがって解釈とに影響を与える例を挙げておく。すなわち

18 見まくほり我がする君もあらナクニ何しか来けむ馬疲るるに

(巻一、一六四)

がそれである。

第五句の「馬疲る」は、類聚古集などの古写本をはじめウマツカラシニと読むものが少くない。本居宣長の『玉の小琴』にはじめてウマツカルルニと読んだが、定訓となるには時を要したのであつた。それにしても歌としてふさわしいとは思えないウマツカラシニがどうして永く支持せられて来たのであろうか。

思うに「有らナクニ」を逆接にとつて「いないのに」とすれば、「馬疲るるに」と逆接に読むことは、条件法の前段に逆接が二つあることになって不都合だと考えたからであろう。そうした懸念から「馬疲らしに」という読みが發明せられたに違いない。

しかし「あらナクニ」が条件法とはもともと関係のないものであつたとすれば「馬疲る」の読みにそうした配意は無用である。自由な立場で「馬疲るるに」と「馬疲らしに」とを較べる時、さきにも

いったように後者にはやはり無理があるようで、ウマツカルルニの自然であるに及ばない。ウマツカルルニとよめば全体は

見たいと切に願う弟もいなくて、何しに来たのだろう。馬が疲れのばかりなのに

となるのである。

最後に一言しておきたいことがある。本論考を通じて、わたしはナクニが詠嘆的終止、というよりもむしろその中止形であることを主張した。それで間違いはないと思うのであるが、ナクニを逆接に解しているのは、さきに挙げた類聚古集の「馬疲らしに」の訓などより推定すると、平安朝にはすでにほじまっていたもののようにである。一時代前の万葉後期の人たちも同じように理解をしていたこと

を積極的に否定する資料も見当らない。

今一つ加えておく。

かくしてやなほやまからむ近からぬ道の間をなづみまる来て

(巻四、七〇〇)

の末句は、諸注例外なしに「骨折ってやって来て」(大系本)と中止形に訳している。前後の関係からいえば「骨折ってやって来たのに」と逆接に訳しても意味が通るようである。むしろその方が通りがよい。しかしこのばあいは中止形であることがはっきりしているために、逆接に訳すものがないのであろう。やはりナクニのニが口語ニのニに似ていることが混乱を生じたのではないだろうか。